

# Alma Mater 白陵

第 7 号  
昭和63年11月9日発行  
発行 白陵会  
〒676  
高砂市阿弥陀町阿弥陀2260  
TEL. 0794 (47) 1675(代)



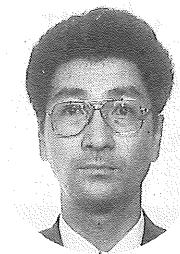
## 巻頭言 「光と陰」

会員の皆さんお元気ですか。秋も深まりましたが、仕事に、勉強にと大いに頑張っておられることと思います。

さて、先日、学園に行ってみました。二十五周年記念事業の管理棟校舎の新築工事が、進んでいました。我が母校も四半世紀を歩み、さらなる飛躍を目前にしているという光景でした。

躍進を続ける白陵の評価は年々高くなっています。今や、全国屈指の進学校としての地位を確立し、新たな飛躍を期して発展し遂げる勇姿は、我々卒業生にとって、誠に誇らしいかぎりです。そして、この管理棟校舎の新築も、エポックとして学園の歴史を刻みます。

その管理棟校舎の新築工事が行なわれている学園には、生徒たちがいました。学外から来る者に対して、帽子をとって礼をするしぐさや、クラブ活動をしている姿は、まったく昔と同じで、我々が学園にいた頃を思い出させてくれます。しかし、我々が知る母校の光景は年々、発展と共に変わっているようです。管理棟校舎の完成によって、三木園長に叱られたり、先生方に説教された(中にはほめられた?) 思い出深い園長室や職員室が、消えてしまいます。学園にとってさらなる飛躍につながる管理棟校舎の完成は、卒業生としての我々にとっても素晴らしいことだと思ながらも、ちよっぴり寂しい気がします。「光」によって生まれた「陰」に対する一卒業生の単なる感傷なのですが。



会長 黒川 芳一

# ごあいさつ

もう早や十一月、白陵の森も、学園につながる樺並木も紅葉につつまれ、心地良い風が吹く季節がやってきまして、白陵会の皆様はいかがお過ごしですか。

三木学園長が亡くなられて六年を迎え、月日の立つはやさに驚いているこの頃ですが、我々の母校である白陵は学園長がめざした「日本一の学校」へ着々と発展しています。

昭和三十八年に学園が設立されて四半世紀が過ぎ、大学入学は兵庫県下第三位の実績で堂々たるものです。これは、八木校長を中心とした諸先生方の並々ならぬ努力と生徒への愛情がなくては成し得ない事です。



理事長 三木 一正

# 学校の近況から

## ―ご挨拶にかえて―

暫し拍手が鳴りやまなかった。二十三日目を迎えた白陵文化クラブ発表会

私達白陵会も三千四百余名という仲間が社会へ巣立ち、職場に勉強に活躍していますが、まだまだ他高校に比べれば微々たるものです。しかし、白陵高校の発展に少しでも寄与できればと役員一同微力ながら取り組んでいますので、会員の皆様も暖かい心で応援していただければ、これに増す喜びはありません。

最後にこの白陵会報と一緒にアンケートを同封させていただいていますので、これからの同窓会のあり方、役員相互の親睦を考えていく上でのご意見を聞かせていただければ幸いです。今後共皆様のご活躍を心からお祈りして挨拶にかえさせていただきます。

当日のことである。トリをつとめた中学三年有志連が歌舞伎十八番「勸進帳」をみごとやってのけたのだ。柔道畳を敷きつめた即席の花道を弁慶役者(う)が大見栄をきり、飛び六方で華やかに退場すると満場ヤンヤの大喝采と相成った。白陵の運動会はブラスバンド演奏に先導され整然とした入場行進が呼びものだが、それに反して文化クラブ発表会となるとさっぱりで、今は亡き学園長に至っては遂に癩癩玉が破裂

「文化祭中止」の鶴の一声で哀われにも文化祭は姿を消した。その後生徒会の切なる復活嘆願によりやつと日の目をみたのが今の文化クラブ発表会である。しかし内容は相変わらずのお粗末続き、今度も又かと思っていた矢先のことでだけに居並ぶ職員生徒はいうに及ばず参加した父兄たちも啞つと度胆を抜かれた。固いことが売りものの白陵に演劇感覚の芽が育ち始めたことに一種の驚きがあった。しかしそれにしてもできすぎていると調べてみたらやはり歌舞伎の好きな先生が指導していたことが分った。更に驚いたことにはその先生はなんと白陵出身というではないか。第十二回生の山口透君である。この英語の先生、学生時代から歌舞伎に病みつきになり、いつか歌舞伎に挑戦したいと思っていたとかで、芝居気のある生徒たちに出くわし今回の上演となった。それにしても楽しい話である。すっかりした指導者がいれば何事も成就可能だし、白陵としてもたんなる勉

強学校でないことを実証したというものだ。

扱て指導者といえ本校も結構個性の強い先生方が多いけれど私学の特質を生かした方向性での結束力は抜群。その結果は別項記載の大学合格者調べの通りである。この間発行された受験雑誌によると本校の対卒業生現役合格比率は東京大学全国第十三位、京都大学同第九位というから、これはもう信じられない成長ぶりだ。このことは関係者の精進の賜ものであるが特に卒業生つまり同窓会諸兄の物心両面にわたる励ましあつてのことと深く感謝している。

華やかにくりひろげられた学園創立二十五周年記念式典から早や一年、今学校では記念事業として新校舎の建築が進んでいる。既に九割方できあがっているの間もなく同窓会から贈られた五十号の油絵が玄関を彩ることであろう。この中には新しい理事長室もできる。ぜひお訪ねいただきお茶を飲みながら時には四方山話を、時には日本の将来を論じるも又愉しからずやである。そんな情景を思い浮かべながら、そして工事の槌音を耳にしながら、今この原稿を書いている。

最後に日頃のご無沙汰をお詫びし、今後一層のご支援をお願いしてご挨拶と致します。

# 創立25周年記念事業 管理棟校舎完成間近か!!

朝夕めつきり涼しくなった十月下旬のとある日、当学園では創立25周年記念事業として管理棟校舎新築工事の真最中という事で取材に出かけた。正門を抜け、少し色づきかけた櫛の並木をしばらく行くと武道館の北西方向に十二月中旬完成めざし、急ピッチで工事が進む駆体が見えてきた。工事途中とはいえ、全階ほぼコンクリートが打ち終った姿は威風堂々としており、完成後の新管理棟校舎の立派さが目に浮かぶ思いだった。

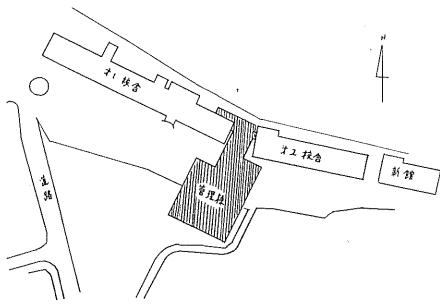
「管理棟」とはスパルタ教育の白陵らしい名称であるが、「管理」野球などと世評上、あまりいい響を持つていないのではないかと思うのは、私自身の白陵時代の「恐怖」体験からくるのであろうか。管理棟は、一階に生徒昇降口があり、学生は登下校の際、全てここを通ることになる。二階には、職員室、校長室などがあり、先生方は、二階通路から、各教室に行くように設計されている。

## 管理棟校舎概要

○床面積 地階・二五六・〇〇㎡ 一階・五五八・八〇㎡ 二階・八〇七・六五㎡ 計・一、八四六・四五㎡

## ○施設

地階・多目的ホール・保健室・備品庫・便所 一階・玄関ホール・事務室・理事長室・応接室・会議室・書庫・印刷コピー室・生徒昇降口・便所 二階・校長室・職員室・ホール・資料室・進路指導室・〇A室・休憩室・ロッカー室・便所



# 白陵今昔物語 (2)

「二十五周年」に思うこと

教頭 濱田 忠彦

同窓会の皆さんお元気ですか。既にご案内のように、昨春秋、学園創立二十五周年の記念祭を行い、今、その事業の一環として、本館別館の間に管理棟を建設中ですが、本年末には完成する予定です。学園も斯様に建物の増築・校地の整備相俟て愈々学び舎らしい趣を濃くして参りました。あと十年余り経てば、諸兄の齢と同じく、更に重厚の風が加わるのではないのでしょうか。

実は、私、この夏恒例の職員旅行で金沢を訪ねた際、金沢城跡近くの石川近代文学館を見学しました。御承知の方も多いと思いますが、建物は旧制四高の元校舎であり、石造・練瓦造りの、実に堂々たる風格をもつものでありました。一世紀の星霜を経て、なお立て付けに些かの狂いもない、古典主義風の、流石明治前期の気風を象徴する重要文化財との感を強くしました。

学園長の母校の旧制姫高も、今なお、創建当時のまま本館の一部・講堂・校門・敷石などが遺存され、いかにもネオロマネスク調ともいへべき大正建築の貴重な記念物であります。この二つの校舎を比べますと、おのづと明治・大正の夫々の時代の特性があらわれているように思えます。

明治以降の、時の流れをふり返ってみますと、約四十年を一つのサイクルとして進んで来たと考えられます。維新次来四十余年かかって不平等条約を撤廃しましたが、それに至るまで朝野を挙げてこの国家的課題を解決しようとし、官立の学校校舎の建設に迄、国家の威信を掛けていたが如く思われます。そして、その玄関の穹窿といひ、素朴な飾りのついた木造りの講堂、更に戦のさなか、防空壕

をつくる為切り倒せと強く迫る軍部を激論の末譲歩させ、守り通して来たゆりの木その他の樹木など、今に残る旧制姫高の佇みは、学校建造物と雖も、単に天下国家に奉仕するものだけ思惟するものではなく、個的生活者の「生」に深く関わるものとして考えた大正教養主義のあり方を思わせるものがあります。明治三十六年五月、華嚴の滝に身を投じた藤村操の死は、あるいは若者の関心が、私的の内面世界に向けられはじめていた一つの徴候であったかも知れません。そして、この風潮は敗戦迄の、いや学制改革迄の四十余年、殊に十五年戦争のさなかにあつては多くの圧力にねじまげられつつも、脈々と受け継がれたものであります。

殆んど最後の旧制高校生として、ロマン主義的教養を身につけ、剩え、ものごころ付いた頃から成年に至る迄ずっと戦に明け暮れ、強大な国家権力の存在を生理的リアリティをもつて感じざるを得なかつたご自身の苦い経験からでしょう、敗戦後に生れた人々に自らの理想とするに近い教育を施したいというのが、学園長の学生時代からの念であったのと違ひますか。由来人間の生とは理想と現実との相関の中に在るといえましよう。観念から現実への帰還、現実から観念の世界への批判という相関関係をもつてはじめて正しい自己認識が得られるのでしよう。

現在「教養」というものは、多分にシニカルな眼差しでしか眺められないものでしょうが、嘗ては人間をつくる上で欠くべからざるものと見為されてきました。今は何事も感性でもって巧みに処理するのが小粋であり、事に真剣にとり組むのは野暮という風の世の中

でありますが、学園長が敢て「教養と節度」を校是として一つのこだわりをもってその風潮に立ち向われたのはそれなりの深い根拠がありました。学園長は生徒によく寮歌を教えられました。見戯に類することも知れませんが、今當ての高校記念祭の折、寮歌を歌うに先立って、リーダーが絶叫した「序文」の一つここに掲げてみましょう。

「先人力強く営める白陵の起伏しにも、涓々と流れをなせる時運の歩みにも、若人の真情の流露は凝って一聯の歌草をなし、その情にして純なる、簡にして勁なる、以て痴人の蒙を啓くべく、以て懦夫をして起たしむべし、されば春の朝高く吟ずる時は高踏乱舞の調となり、冬の夕低く奏すれば哀愁悲調の曲と出で、げにうら若き口辺をこそ飾るに足るなれ。

若き誇を思ふ多恨の我学にして、なきて寮歌を愛さざるを得べけん。友よしよき事を歎くいとまだにあらば、高欄によりて青春の一時しばし愁を捨てよかし。まこと稚氣愛すべきものがありました。

敗戦后四十余年。新しい大学も次第に整備されましたが、ここに気付くことは、国立のそれはどこも画一的な建物で、いわば建築が機械的な機能の組織化による合理性だけを求めている、まさに経済的効率の獲得の対象であると見為されているかに思えることです。国の管理下にある学校としては止むを得ない面があるかも知れませんが、対照的に多くの私立の大学は、美麗の建物を競うことよって、学生募集というその経済的効率を計り、本来の目的たる学理追究面、しかも外部の人にはわかり難い面は如何かと危惧されるころもあるやに思われます。これらも明治の富国強兵策、大正・昭和初期の教養主義に次いで、敗戦后殊にその最近十余年の機能的経済主義の世相の夫々の反映でしょうか。

今、創立以来二十五年の時の流れを思う時、われわれは何によってそれを存在として感じ得ましようか。三千名を越す同窓諸兄の数にか、道路の樽並木の成長振りにか、将又次第

に整備されつつある建築群にか、私はやはり、現にこの学園に学びつつある千名近い生徒達の中にある「生」に於ける伝統と変貌とにそれを見出し度いと思えます。来るべき二十一世紀、本校も四十余年の歴史をもつわけでありませんが、維新以来の流れ同様、本校も時期を画する可能性を持つ事が出来ましようか。今後十五年、発展を遂げるものとして、時の流れに於ける個人の位置は、その個々の「生」

# 通学路は今

## — J R 曾根駅から学校まで —

私は姫路にある会社に勤めている。ある日加古川から通っている同僚が、「曾根駅で、白陵の生徒がどつと降りるから曾根へ姫路はゆつくり坐れますよ。」なんて言っているのを聞いて、久しぶりに普通通学路でも歩いて学校まで行ってみるかと思いたった。JRの車窓からは山のふもとと校舎や赤い屋根の音楽教室がはるかに見えるけれど、もう卒業してからかならないかと思っているし、大部変わっているんじゃないかと思つた。

さて、朝の七時台のJR曾根駅。七時四十分着の下り網干行普通電車が着くと、あのカーブした独特のホームは学生服で埋まってしまう。跨線橋は押すな押すなの大混雑。

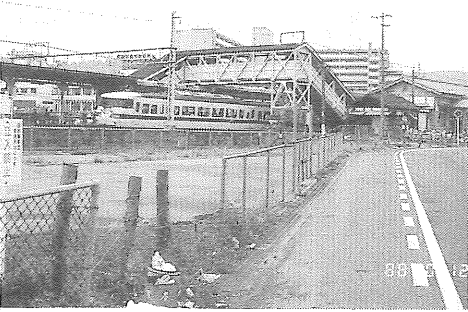
聞いたところでは七時四十四分の電車の後に八時二分着の下り電車が最近増発されている。これだと始業に充分間に合い、JRでは、白陵の生徒さんの利用が多いですから一本増えましたか言っていた。以前は、八時一〇分台に着く電車しかなく、これを「愛用」していた級友は毎朝学校までランニングだったのを覚えている。もつとも、八時二分の電車は西明石始発のせいか(いや、やっぱり我々の時と同じで早く来て残っている宿題をする

のあり方によって学園が歴史の審判に耐えるものになるという大きな意味を持っております。その意味で善き学園は善き生徒を通してあり、逆に善き生徒とは善き学園に於てのみあると言えましよう。

同窓会諸兄、後輩諸君への今後の一層の厳しい御指導・御鞭撻の程切に祈念する次第であります。

ためか?)利用する生徒は七時四十四分に比べて少い。ということは、西明石より東から通っている生徒が多いということなのだろうか。

これに比べて、ひっきりなしに発着する七時三〇分から八時までの上り電車からは、バラバラとしか白陵生が降りて来ない。



J R 曾根駅前

駅の待合室もどうもイメージが違う。JRになってからだろうと思うけれど、スピードまであって音楽は流れているし、案内板は昔は駅員さんが棒でクルクル回して次の電車を表示していたのが、電光掲示板になっている。出札窓口も場所が変わり、改札口の横に移り、改札と兼用になっている。その跡には、切符の自動販売機が二台並んでいる。待合室の中には缶ジュースの自動販売機まであるが、これらどうも白陵生には縁がなさそうである。駅前に待っている「園長バス」(今の白陵生はどう呼んでいるかは知らないが、我々はそう呼んでいた)もかなり新しく見える。その駅前もずいぶん変わった。

駅を出たすぐ向いのお店はあんまり変わっていないように感じられる。駅の入り口横にはテレホンカード対応型の公衆電話ボックスが二つ並んでいる。タクシーが行列を作っている後ろあたり(駅舎の西)とか、駅のトイレ(JRではトイレの美



J R 曾根駅の曲線ホーム

化運動かなんかをしているようであるが、これは昔のままで汚かった。の東側にあった小屋などが取り壊されて、駅前広場からは線路を走る電車が見えるようになっていた。

駅前から西へ、本屋の方へ行くのが県立姫路別所高校（白陵の山ひとつ西側に新しく開設されている。）生徒達。白陵生は今も駅前を東へ出て寿司屋の角を曲がって2号線を歩道橋で越えて豆崎地区を通る。

駅西の方に道を走らせるとマンション風の建物が立ち並んでいる。それよりも駅東の方は、日通の営業所がなく、トラックは一台も止まってないし、その横ならびにあった農協の古びた倉庫もなくなって駐車場となっている。

駅前の道と線路との間は何もなく遊休地で、一部は最近まで駐車場として使われていたのかアスファルトが敷かれていたが、国鉄清算事業団管理地の立札が寂しく立っている。

駅前の道を東に突き当る角にある寿司屋も新しく建て替えられて小じんまりとした駐車場まである。お店の前の大きなタヌキの置物がユーモラスな感じがする。この角には、過番だったか委員だったか当番で立って、きちんと並んで通学しているかを見ていたものだ。今もそうしているのだろうか。この寿司屋の東側の並びは、昔はマッチ会社の倉庫だったはずだが、今は、カメラ屋、パン屋、パーマ屋、葉屋、おもちや屋とナウいかんじの店が並んでいる。

ここからは北に向って、大きな池に沿って国道2号線まで歩く。この池は以前はもっと大きかったのが、高砂市立鹿島中学校の新設などで半分位になってしまっている。この道が2号線と交わるまでに、確か、いかわし日本の自動販売機があったはずだが今はない。2号線は歩道橋で越える。自転車も渡れるようになっていて、天川中学校が廃止になってからは、利用者はもっぱら白陵生のようなのである。

歩道橋を越えれば、豆崎地区。静かなたた

ずまいの旧街道沿いに古い家並が続く、お昼前は、通学時間帯の喧嘩がウソのようである。ここを一人で歩いていると、いろいろな思い出が頭をよぎる。とりわけ思い出されるのは、亡くなられた園長先生が年に一回位だろうか、曾根駅から学校まで歩かれることがあった時のこと。多分、生徒達の通学状況を見るためだったと思うが、なんと園長の前後三〇メートルは誰も近寄らない。不思議と近寄りたが、そこだけがエア・ポケットみたいになっていた。

豆崎地区の西のはずれ近くで北へ曲がる。この角に小さな店があって、よくクラブ活動の時などジュースなんかを買い出しに行ったものである。今は体育館の傍にジュースの自動販売機があるのに、今の白陵生は必要ないのかも知れない。

この道を真すぐ行けば天川中学校があって、マラソンの時なんかその校舎の横を走ったものだった。今は廃校となって、その跡は大きな中古車センターになってしまっている。その傍りに記念碑が建っているだけだった。

ハスの葉の茂るタメ池の横をうねうねと歩けばもう校門。校門の前は広くなっているが、校門の塀からわずかにのぞく鉄製の柵が、無言のまま一種の「境界」がここにあることを示す。校門わきの大きなタメ池は堤防がコンクリートできれいに整備されたが、今はもうここで泳ぐような無茶な生徒はいないだろう。

校門からは広い学園道路が校舎まで伸びている。宿題を忘れて校門まで走らされたことも思い出して。ふと見上げるとここからは、ケヤキの街路樹がおい茂って校舎も見えない。そうか、この木々の発するフイントチップが今の白陵生の頭に刺激を与えて、それで後輩達は我々よりもいい成績を残しているんだ、などと勝手に考えたりした。

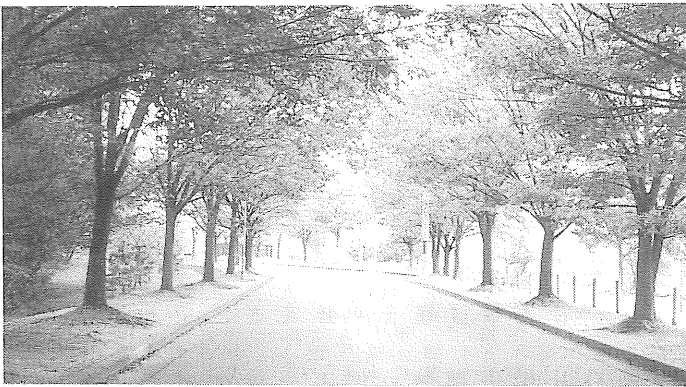
体育館のわきに自転車置場が二つあって、昔は白転車でいっぱいだったのが、今はパラパラという感じで、うち一つは物置きがわり

となつてゐる。もう自転車を通える所から通学している生徒も少なくなつてしまつてゐるようだ。

校舎は昔からあつた本館・別館に加え新館が並んでいて、今度は管理棟が出来る。だんだんと拡充されてきたのは嬉しいけれど、小じんまりした頃の思い出は、本館・別館・新館・管理棟なんて聞くと、どこかの観光旅館かな、なんて思つてしまふ。

本館入り口まであの坂を息を切らして登つた。後輩達の明るい声が卒業生の思いを現実にはひき戻す。「いけない、いけない。懐古主義に陥つてゐたな。」と反省する。

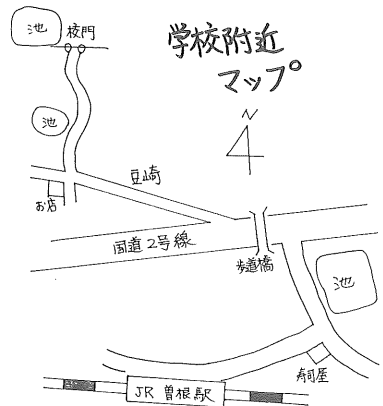
「せつかくここまで来たんだから、懐しい恩師に会つて来ようか。」と思つて玄関を入つた。  
(片山安孝 14期生)



櫟並木の学園道路



通学路 (豆崎街道)



# 白陵軍団全員集合!! その2



写真はJ C白陵会と姫路市役所白陵会合同懇親会

「理性と法による社会秩序を確立し、個人の創意と公正な競争を通じて、経済の発展を実現し…」国連憲章のようなこの仰々しい文言は、我が青年会議所の宣言文である。英語のジュニア・チェンバーを略して通称J Cと呼ばれ、平均年齢は三五歳前後で、四〇歳を過ぎれば有無を言わず退会させられるシステムになっている。この大時代的な宣言文といい、世間ではオジサンと呼ばれている人を「青年」と平然と自称している不思議な団体である。

姫路青年会議所は、現在一八四名の会員を擁し、「友情」「修練」「奉仕」の三信条を「建前」に日夜活動している。メンバーの多くは、企業経営者、自営業者が主で、中でも二代目、三代目のボンボンが多いというのが定説であり、その活動ももっぱら夜のネオン街の会合が中心であると穿った見方をする人もいる。ただここに紹介する白陵同窓生一名のメンバーは総てJ Cの理想にもえる新進気鋭の人ばかりであるところとあえず書いておく。

さて、姫路J C白陵会であるが、「白陵OB一ダース」「J C淳心会」「飲む口実」と三拍子が相揃い、J C白陵会結成の機運が盛り上がり吉田衛正君（八期生・株式会社しらさぎ代表取締役）、村角伸一君（九期生・株式会社ヒメプラ取締役）が中心になって呼び掛け、今年二月六日「レストランしらさぎ」において結成大会が開かれた。会長には一番年長であるという単純な、実に日本的な理由により小西孝明君（二期生・小西醤油取締役）が選任された。小西君は現在J Cの監事という重責にあるが、残念ながら例の年齢制限により今年限りで惜しまれつつ「卒業」する。卒業後は、J C・OBとなるが（当たりまえ）総会議決により

J C白陵会を脱会できず、さらには永遠に会長をやらされることになった。どの世界でも先に生まれた人は大変である。二期生には、作原正博君（株式会社サクハラ代表取締役）がいるが、童顔のためフケ顔の小西会長とは対照的で同級生とは誰も信じない。三期生では、天野泰文君（天野法律会計事務所所長）、曾根芳明君（株式会社ソネヤ代表取締役）がいるが、鈴木茂実君（七期生・株式会社板文）と共に高額の年会費を納める割りにはあまり例会に顔を出さないと噂だ。仕事に忙しいと善解しておく。小川富士夫君（六期生不動殖産株式会社代表取締役）、山戸敏彦君（八期生・播磨土木工業株式会社代表取締役）、黒川仁君（八期生・株式会社ペンギンシステム代表取締役）、加藤雅直君（一〇期生・株式会社加藤工務店取締役）は、いずれも柔道部のOBである。特に小川、山戸両君は仕事に不動産・土木建築関係であるうえ、藤田家将先生の猛烈な指導よろしく、オシもアクも強く、ガラまで上品で、吉田君を含め姫路J Cの要職を歴任し、いつの日かこの三名から理事長をというのが我がJ C白陵会の悲願である。

J C白陵会は、結成後、本年四月二日親睦ゴルフコンペ、八月二日に姫路市役所白陵会との合同親睦会など「遊び」を通じて白陵の輪を広げ、その結束を強めて着々と組織を強化している。今後の課題としては、近年富みに母校の偏差値が高くなり、姫路出身の白陵卒業生が減少し、卒業後も高級官僚、エリート社員として郷里に帰らない人が増加した結果、姫路J C入会者がなくなり、いつしか本会が敬老会を兼ねた「J C・OB白陵会」になってしまおうのではないかと懸念している。（今回は、白陵柔道部OB会の予定です。）

## 昭和63年度 大学入試合格者数

東大22, 京大23, 阪大20, 早・慶・上智大24, 国公立大医学部39

国 公 立 大 学				
大 学 名	61 年	62 年	63 年	
東 京 大	8	15	22	
京 都 大	22	28	23	
一 橋 大	2	3	1	
大 阪 大	10	10	20	
北 海 道 大	3	12	6	
東 北 大	3	17	13	
東 京 外 大	1	1	1	
筑 波 大		4		
名 古 屋 大	2	3		
九 州 大	1	4	5	
神 戸 大	21	22	23	
岡 山 大	2	2	4	
広 島 大	5	16	11	
防 衛 医 大	3	6	5	
大 阪 市 大	5	8	8	
そ の 他	37	51	76	
合 格 者 数	125	202	218	
(内医学部)	(17)	(27)	(39)	
対卒業生国公立大合格率	79.7%	120%	124%	

私 立 大 学				
大 学 名	61 年	62 年	63 年	
早 稲 田 大	25	12	11	
慶 応 大	20	21	12	
上 智 大	4	10	1	
中 央 大	4	1	1	
東 京 理 大	10	7	4	
明 治 大	2		2	
津 田 塾 大	1			
国 際 基 督 教 大		1	1	
関 西 学 院 大	22	22	18	
関 西 大	15	12	9	
同 志 社 大	24	13	10	
立 命 館 大	3	8	8	
大 阪 医 大	3	3	2	
関 西 医 大	2	2	3	
兵 庫 医 大	2	2	2	
大 阪 歯 大	6	1	1	
そ の 他	30	21	15	
合 格 者 計	173	136	100	
(内医学部)	(10)	(9)	(8)	

## アンケート実施にあたって

アンケート委員会

委員長 吉田達哉

躍進を続ける我が母校「白陵」のため、白陵会役員一同、非力ながらも頑張つて参りました。ここ四・五年の間にも各委員会の分割組織化、理事会の発足等、今後増え続ける会員の皆さんに少しでも「白陵」を身近かに感じて頂けるよう、常に努力・工夫を凝らしておりますが、役員会内部だけでは、どうしても意見等の片寄りが見られ、広く全国でご活躍中の会員の方々の御意見を承る事が出来ません。この事が常に役員会でも、重要議題となつておりました、昨年末の理事会で、会員全員にアンケートを行なつてはどうかとの意見が出、本年度第一回の役員会に於て、全員の同意を得、同時にアンケート委員会が発足致しました。その後、当委員会において打合せを重ね、本日この会報と同時にアンケート用紙を発送するに至りました。できるだけ簡単に御記入頂けるように努力致したつもりでございます。是非、今後の同窓会活動が、よりよい方向に進みますよう、忌憚のないご意見をもって、ご返送頂きますようお願い致します。

# 白陵会ニュース

## ★白陵会役員交替

湖中明憲君(2期生)、奥野昌三君(12期生)が新たに理事に就任し、また常任幹事に、森崎晴友君(4期生)、三木啓司君(16期生)、中谷泰健君(21期生)、三木健史君(23期生)、中里寛君(23期生)が就任しました。さらに、新役員に就任に伴い、役員会の中の委員会を再編し、同窓会の運営の強化を図りました。

## ★躍進する白陵

六十三年度の大学入試では東大22名、京大23名という輝かしい成績をあげ、現役合格者数では全国で東大22位、京大20位にランクされました。これを対卒業生現役合格率で表わすと、東大13位、京大9位になります。

## ★三期生同窓会開催

卒業後二〇周年、白陵三期生同窓会が昭和六十三年八月十四日姫路ホテルオクウチにおいて、開催されました。恩師先生八名を含む六五名が参加し、二〇年の歳月の変化に夜遅くまで話がはずみました。

## ★教員異動

昭和四十八年からお世話になった社会科(地理)の寺田眞一先生が退職されました。

## ★住所変更の際は必ずご連絡を!!

転宅、就職、大学進学等で住所を変更された場合は必ず事務局(高砂市阿弥陀町阿弥陀2260・電話0794(47)1675代)までお知らせ下さい。会報等の郵便物が配達できなくなりますので、よろしく願います。

## ★お詫び

前回の会報(第6号)で管理棟校舎の新築記念に元白陵美術講師・甲本利一画伯の絵を寄贈した記事を掲載しましたが、金額が誤っていました。お詫びします。

## ★白陵会からのお願い

アンケート用紙を同封していますので、必ず回答していただきますようお願いいたします。なお、アンケート結果は次の会報で報告します。

白陵会役員名簿  
 会長 副会長  
 理事 常任幹事  
 書記 監査  
 会計 庶務

校内幹事

岡野清和	西村善弘	村久彦	中山保	畔村口上	宮崎一陽	小長龍孝	福原孝正	黒田憲義	大芳健憲	中里智健	新田泰正	河内英直	山田啓直	牛尾隆	秋田修彦	三木修彦	町田快友	片水達雅	若水章	志方正賢	中山敏章	大池公晴	池田芳和	森田達康	鎌田義達	正田昌隆	伊藤裕泰	下加明	加藤正明	萩野文憲	奥貞吉	神田喜好	天名勝	湖川裕	川田文	上田裕	沼田裕	森本義	川本勝	白川行一											
17	15	14	12	12	12	11	11	8	6	4	3	3	2	1	23	23	22	21	21	20	19	18	16	15	14	13	12	11	9	8	6	5	4	4	1	1	10	10	7	10	12	9	3	3	2	2	2	6	3	1	1

## 白陵会収支計算書

昭和62年10月1日～63年9月30日 (単位円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
会費	1,740,000	会議費	320,110
受取利息	359,682	慶弔費	5,230
名簿収入	66,000	通信運搬費	204,400
広告料	30,000	印刷費	251,250
		支払手数料	750
		雑費	26,100
		25周年記念品料	700,000
前期繰越	4,574,141	後期繰越	5,261,983
合 計	6,769,823	合 計	6,769,823

## 編 集 後 記

管理棟校舎完成間近。学園も新しい時代へと突入して行きますが、我々広報委員会も新体制でスタートしました。沼田委員長から、天野新委員長へバトンが渡された、広報委員あけて、新しい会報を創り出そうと頑張っています。会報の目的に、学園と同窓生、同窓生同士のつながりを深めることがあります。その目的を達成するために、皆さんの意見や投稿をお待ちしておりますので、ご協力をお願いいたします。よろしく。